

INTRODUCTION : 世界一強い国、世界一金持ちの国、世界一自由な国、世界一よい国、世界一か世界一好きなアメリカ人が評するアメリカ。にないものは世界中にない。アメリカで起こりえないことは地球どこにも出現しない。アメリカにとって必要なものすべてがアメリカにある。1492年10月、この大陸の東の端で、正体不明のパンックを経験した男たちがいた。クリストファー・コロンブス一行である。この日をさかんに、何もなし、あるのはただ陸地という無限の広さをもつ大陸に、すべてのモノ、コトがおしよせはじめた。世界中のあらゆる国々から様々な民族が、それぞれ固有の文化をもつてやってきた。アメリカ合衆国は、現在もなお、その歴史をくり返し続ける。

イバニーズギターも、そんなアメリカン・ムーブメントの中でアメリカにやってきた、エスニック(移民)である。「アメリカ人は、アメリカ人に生まれるのではなく、アメリカ人になるのだ。」というたとえをそのまま当てはめれば、イバニーズは日本のギターでなく、アメリカのアイバニーズである。

1908年、最初のイバニーズギターがコンプリートされて以来、イバニーズはアイバニーズだったわけだから、もう完璧なアメリカン・シンチズン(アメリカ市民)である。アメリカ合衆国は、弱肉強食の国である。弱いものは自然に淘汰されていく厳しい現実主義の国である。そんな環境の中であって、アイバニーズは、友とする10本の指たちを増やし続けている。旧大陸ヨーロッパでも同様である。ロンドンのスタジオ、パリのステージ、その他、洋上の小島でさえ、イバニーズギターは音楽を生み出し続けている。

写真のナンバー・プレートは、アメリカで実際に走っている車につけられているものであり、ここにあるディスクは、イバニーズギター・ユーザーによりレコーディングされたものだ。又、思わぬジャケットのクレジットの中に、COURTESY OF IBANEZ GUITARSというタイポグラフィを発見することがある。最近では、バーゲンセールの大量のレコードの群の中から引き出した1枚、ジム・モッシーナのオアシスがそれてある。過酷なミュージカル・イクイップメントのビジネスの中に生きる私たちが遭遇するオアシスそのものの瞬間でもある。

身びいきかもしれないが、サウンドクリエーションで名前を上げたプレイヤーたちに愛用者が多いように思われる。凝り性のお客さん達は、いつも私たちに悩ませるが、力強いアドヴァイザーでもある。我々の多くのギターが、アーティストとのスタッフワークでクリエイトされたが、とりかかれば、コロンブスとアメリカ大陸の出会いのようなケースが多い。「PROFILE」と題された83イバニーズ・カタログは、イバニーズギターのLINE-UPを出来るだけ詳しく紹介することは勿論だが、そんなアーテ



ィストとアイバニーズギターのリレイション・シップについてもふれてみたい。トップアーティストの心あたまるパーソナリティや、ジャーナリズムに登場していないプライベート・アクトなど、興味のつきぬことはないだろうか。ギタープレイヤーとしてのグロウイング・アップに、若干なりともお役に立つものと思う。

「PROFILE」はその意味で、イバニーズ・グッドフェローズの「PRO'S」ファイルでもあります。

